

論說

●攀樹性のヤウジウチ (其一)

理學士 石井重美

私は、大正五年の七月、房州の高ノ島で、一種のヤウジウチ(それは *Urocampus rikuzenius* Jordan and Snyder であると思ひます。以後之を唯だ單に *Urocampus* と呼びます。)の生活標本を得、その習性に付て多少の觀察をなすことができましたが、その折、そのヤウジウチが攀樹性であること、また、游泳の場合に體を垂直の位置に保つことなど、これまでウシウマに於て知られた事實と一致する點の甚だ多いことを發見しました。(ウシウマの運動に付ては、Anthony 及び Chevroton の "Con-sidérations sur les attitudes et la locomotion de l'Hippocampe, étude chronophotographique," [Arch. Zool. exp. et gén., Notes et revue, tome 51, no. 1, 1913.] と云ふ面白研究報文があります。)それで、茲に、當時觀察した事柄の一部分を報告し、それに付て皆さんの高教を仰ぎ度いと思ひます。

(論說) ○攀樹性のヤウジウチ (石井)

Hippocampus は、硬骨魚類中、所謂 "Arboricoles aeriens" なる *Anabus*, *Periophthalmus* などに對し、本來の生活、周圍——即ち水中に在つて攀樹性 ("Arboricolisme") を示す奇異な魚として最も普通に知られて居りますが、之に近縁のヤウジウチ類では、攀樹性を示す者が無いといはれ、さうして、此の攀樹性の有無——語を換へて云へば、尾部の纏絡性であるや否やといふ事は、*Syngnathidae* を *Syngnathinae* と *Hippocampinae* とに分つ主な標徴の一つに數へられて居ります。Jordan 及び Snyder ("A review of the Hypostomidae and Luophobranchiate fishes of Japan," Proc. U.S. Nat. Mus., Vol. XXIV, 1901.) も、その中に *Urocampus* を含む *Syngnathinae* の標徴の一つとして "tail not prehensile" と云ひ、また、その新種として記した *Urocampus rikuzenius* に付ても、尾部の纏絡性にして、その動物の攀樹性であることは勿論述べてありません。

(論 說) ○攀樹性のヤウジウヲ (石井)

私の観察に用ひた *Urocampus* は、高ノ島と館山との間で、干潮の折は徒渉して渡り得るほどの所を、小さな手繰網を曳いて獲たものであります。

此の邊は、海底が一體に砂で被はれて居りますが、なほ方々にアチモの密生した部分があつて、ヤウジウヲの爲めに好個の棲息場を作つて居ります。さういふ處では、アチモは極めて密に茂生して、其の葉と葉との間隙は、

(勿論處によつて多少の相違はありますが)

一寸以下になつて居る場合が澤山あります。

採集して観察に供した *Urocampus* の數に

付ては、不幸にして當時それをノートに書留

むる事を遺失した爲め、今その正確な値を擧げることのできないのを憾と

しますが、私の記憶に存して居るところでは、十二三尾であつたと思ひます。勿論その中には雄も雌もありました。

材料は採集後直ぐに持ち歸つて、水産講習所實驗室備付のタンクの中へ入れました。(實驗室まで搬ぶ途中は、

海水を盛つた硝子鉢の中へ入れて置きました。) タンクは、長さ二尺、幅一尺三寸、高さ一尺を有する長方形の

硝子函で、底には、厚さ一寸五分乃至二寸の砂を敷き、それに海水を満してありました。

此處に用ひた海水は、新たに、附近の海中から、唧筒を以て、一旦大きな木製の貯蔵タンク中に汲置いたものを、鐵管で實驗室の内へ導き來り、微細な空氣の泡末と

共に、更に目的の硝子タンク中に注入せしめるやうにしたものであります。また、一方、サイホンを以て排水の

装置をなし、流入流出互に相殺して、タンク内の水深が、

何時も、砂上概ね八寸内外を算するやうにして置きました。尚ほ、

タンクの中には、僅數のアチモ及びホンダハ

ヲを砂中に樹立し、ヤウジウヲの攀登纏絡に

便にしました。

タンク中の水温は、

二十四度乃至二十六度二分を示し、同じく比重は、一・〇二二乃至一・〇二二五を示しました。

以上のやうな條件を具備した周圍の中で、ヤウジウヲは、何れも心地好げに生活して居りました。

観察は皆な晝間に於てなされたものであります。

三

Urocampus の一般形態に付ては茲に委しく述べるこ

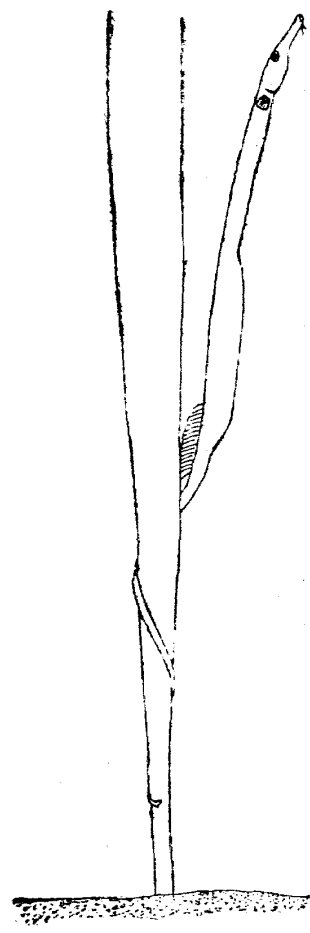


圖 一 第

を省略しますが、たゞその運動と攀樹性との関係のある背鰭、胸鰭、及び尾部の構造に付て數言を費して置きます。

「ウロカンブス」の雄は雌より少し小形です。全體長（尾鰭をも入れ）は、雄に於て一〇・五糎乃至一二・五糎、雌に於て一一・八糎乃至一三・一糎を示しました。

體形は一般に細く、殊に背鰭以後の尾部は著しく細く、恰度蔓のやうになつて居ります。尙ほ、此の部は、最初は左程でもありませんが、尾鰭に近くに從つて益々細く、その横断面は、ほど、多少背腹の方向に細長くなつた長方形を呈して居ります。即ち、體長一二・〇糎を示す標本（雌）で測つたところが、尾鰭に接近せる尾柄の横断面は、短徑約〇・五糎、長徑約〇・七糎を算しました。此の構造は「ウロカンブス」が、一般に、尾部の側面を以て他物に纏絡せんとする特性を有つて居る事實（後文參照）と照應するものと思ひます。

背鰭は、まづ體の中央部に位置して居ります。此の鰭は諸鰭の中、その形の最も大きなものであつて、ほど同長なる（唯前後兩端の者が僅かに短かいばかり）十六本の軟鰭條を有つて居ります。尙ほ、背鰭の基部は、四個の體輪に跨つて、長さ六乃至七糎、最長の鰭條の長さは二乃至三糎あります。

胸鰭は鰓蓋の直後に在つて、背鰭に比べると著しく小形です。擴げたところでは、基部より先端の方が少し幅

(論 說) ○攀樹性のヤウジウナ (石井)

廣く、先端は圓くなつて居ります。體長一二・一五糎の雄で測つたところによると、胸鰭は、長さ（基部から先端までの）四糎、幅（基部に於ける）二・二五糎ありました。雌に於ても略同大です。尙ほ、胸鰭には、八本の、ほど同長な軟鰭條があります。

尾鰭は、此の魚が攀樹性であるに拘らず、存在して居ります。併し、それは極めて小形であつて、それを閉じた時は、肉眼では殆んどその存在を認めることができません。たゞ、それを伸張すると、ほど圓形を呈した尾鰭が突然そこに現はれて、尾の先に一箇の微小な團扇が附着して居るやうに見えます。さういふ尾鰭の長さは、全體長一一・五糎を示す雄で測つたところが、二・四七糎ありました。雌でもほど同大です。併し、幼小な標本は、比較的大きな尾鰭を有つて居ります。即ち、私の檢した體長五・三糎の者（雄）の尾鰭の長さは、二・四七糎を示しました。之は前掲の通り、體長一一乃至一二糎を有する成魚の場合と全く、或は殆んど全く同一であります。之の事實から推してみますと、*Dreocampus* の尾鰭は、前に記したやうな幼弱な時期に於て、既にその發育を停止するものではないかとも思はれます。

それから、「ウロカンブス」の尾鰭には、ほど同じ長さを有つた十本の軟鰭條があります。此の鰭條は、背鰭や胸鰭の鰭條に比べると、その質がより多く剛直です。之は恐らく、尾鰭が、游泳の用をなさず、他物に接觸纏絡

(論 説) ○めとるきす屬吸蟲の新種 (田部)

する性質を有つて居るといふことと關係のあることでありませう。

臀鰭は肛門の直後にありますが、その發育は極めて不良であつて、肉眼では、それを認めることが困難なやうな場合があります。其大さは、體長二・八種の雌で測つたのに、長さ一・五七種、幅(最も廣い中央部の)〇・五八耗を示しました。此の鰭には、三本の痕跡的な鰭條があります。その中、二本は鰭の前後の兩縁に沿ふて走り、一本は中央を走つて居ります。さうして、最前の者が最も長く、中央の者が之に亞ぎ、最後の者が最も短かくあります。尙ほ、臀鰭は、雌に於てのみ認められ、雄に於て

●めとるきす屬吸蟲の新種

京都帝國大學醫學部病理學教室

岡山醫學士 田 部 浩

大正七年二月上旬余は岡山に於て、或る實驗に供せんが爲め、同市附近に産するハ、*Pseudorasbora parva* (T. & S.) を試食せしめたる數羽のアヒル及アヒガモを剖檢したるに、其内三羽のアヒガモ *Anas boschas* L. × *Anas domestica* L. の膽嚢に多數の未知吸蟲寄生せるを認め、同月岡山醫學會第二十九總會席上に於て之を發表したり。其後東京帝國大學理學部動物學教室に於て五島

は全く認めることができませぬ。これは、雄では、仔室(Marsupium)が恰度肛門の處から始まるので、自然さういふ結果が起つたものかと思はれます。

之まで記した部分のうち、直接、體の運動に關係のあるのは、背鰭と胸鰭とで、(物に驚いたやうな時には「ウロカンブス」は、長い體全體を蛇のやうに動かして急激な運動をしますが、それは茲では假りに除外例として置きます。) 攀登纏絡に關係のあるのは尾部です。

臀鰭は形が餘り小さいので、魚の運動には關係しません。(未完)

教授の好意により文献涉獵の便を得るに及び、同吸蟲はメトルキス屬の新種なることを明かにしたれば、五島教授の示教により

Metorchis orientalis nov. sp.

と命名し同年六月京都醫學會に於て報告する處ありたり。